様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３７９５

研究課題名（和文）言語文化の観点に基づく汎用的言語能力概念の構築と教科横断型実践モデルの開発

研究課題名（英文）Construction of a generic language skill's concept based on language culture point of view and a development of Cross-curricular practical model

研究代表者
藤森　裕治（Fujimori, Yuji）

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：００３１３８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,780,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主目的は、学習指導要領改訂を視野に入れ、社会のグローバル化に対応した汎用的言語能力概念を言語文化の観点に基づいて構築し、この言語能力の育成を核とした教科横断型の実践モデルについて、初等中等教育機関における国語科を基幹教科として開発することである。
上の目的に基づいて達成された主な研究成果は以下の通りである。
①汎用的言語能力概念を構築し、その実践理論を論文・著書等で発信した。②教科横断型実践モデルを作成し、講演・学会発表等を通して発信した。③国内外の授業研究を行い、学術論文として発表した。④本研究の成果を政府関係委員の会議等で公開し、学習指導要領の編成に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
【学術的意義】国語科教育学・日本語教育学・比較教育学という異なる研究分野が協働した取り組みが実現し、従来の教科教育研究パラダイムを刷新・拡張する研究方法論と知見とを開発することによって、その成果が学会論文、国際学会における口頭発表、著書刊行等によって広く還元されたこと。
【社会的意義】国や民族、言語文化の違いを越えて求められるべき汎用的言語能力について、国際的な視野に立った概念を構築するという所期の目的がほぼ達成され、平成29・30年度告示の学習指導要領に謳われる「資質・能力」を育成するための実践理論が示され、学習指導要領の編成や各自治体の教員研修等に貢献できたこと。

研究成果の概要（英文）：This research has 2 main purposes as follows. 1) Construction a concept of ' Generic-purpose Language Competence' corresponding to the globalization of society from the viewpoint of 'Language Culture', with a view to revising the curriculum guidelines. 2)Creation and development a model of practice for Japanese Language practice in elementary and secondary education focused on the above concept.
The main research results achieved based on the above objectives are as follows.1) The concept of ' Generic-purpose Language Competence' was constructed and published its practical theory in papers and books. 2) A cross-curricular practice model was created and disseminated through lectures and conference presentations. 3) Lesson studies were conducted both in Japan and abroad, and presented them as an academic paper. 4) The results of this research were contributed at meetings of government-related committees, and the formation of the curriculum guidelines, etc.

研究分野：教科教育学（国語科教育）

キーワード：汎用的言語能力　言語文化　教科横断　実践モデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

【言語文化の観点に基づく汎用的言語能力概念について】

「言語文化」とは、「ある社会において歴史的に創造・継承されてきた文化的な言語そのもの、及びこれを実生活で使用することによって形成されてきた思想・価値観・生活様式・言語芸術等の精神的所産」を指す。「汎用的言語能力(Generic Literacy)」とは、人々が互いの尊厳を認めながら民主的な社会を形成・維持するために求められる汎用的技能(Generic Skills)のうち、言語による理解と表現の活動を基盤として形成される資質・能力（批判的思考力・課題探究力・人間関係形成力等）を指す。国や民族の境界を越えたかかわりが劇的に拡大する今日、文化の違いを越えて社会のグローバル化に適応すべき言語能力を育成することの必要性は多方面で提起され、我が国でも 21 世紀型学力として実践研究が進められている(西山教行 外,2014,「グローバル人材」再考,くろしお出版等)。

【国語科を基幹とした教科横断型実践モデルについて】

平成 20 年度版学習指導要領において全教科に渡る言語活動の充実が示されているように、次期学習指導要領の改訂指針に上げられた教科横断型の学習を創造する基幹教科の一つは、国語科である(高木展郎 外,2015,ジェネリック・スキルとしての国語の学力,日本語学 34-4 等)。本研究グループは、国語科教育、日本語教育、人格教育等、教科の枠を越えた国内外のリテラシー教育について検討し、それに伴う授業コミュニケーション研究を学校種の枠を越えて蓄積してきた。これらの研究はいずれも言語文化圏の違いを越えて成立する学力観・教材・教育課程を共通の探究テーマとしている。その知見と方法論を基幹教科としての国語科において統合させることは、教科横断型実践モデルをより具体的で完成度の高いものにするはずである。

２．研究の目的

本研究のねらいは、グローバル化の進む国際社会をたくましく生きることのできる言語人格を児童・生徒に育成するための授業・教育課程の改善に貢献することである。そのために教科教育の枠組みを再検証し、汎用的言語能力概念を定位し、教科横断型の実践モデルを開発する。その成果が次期学習指導要領及び実践場面に活用されることをゴールとする。

３．研究の方法

本研究は専門領域の異なる研究者が互いの知見と方法論を生かしてそれぞれのアプローチから共通課題に取り組むとともに、その成果を学際的に統合する研究体制で進められた。

研究項目を以下に示す［文献調査］［臨床的調査］［教材等開発］の３部門に分け、次期学習指導要領の改訂作業と並行して展開した。

［文献調査］①教科書・教材の横断的調査、②関連する著書・論文等の収集

［臨床的調査］①教科横断型実践に取り組む学校での授業研究、②海外初等学校の訪問調査・授業研究、③関係諸団体・機関への聴き取り調査

［教材等開発］①汎用的言語能力を育成するための教材開発、②教科横断型のカリキュラム開発

４．研究成果

以下、本研究の成果として示された論文・学会発表・講演・著書・社会貢献等の中で、主要な業績・事業を抄出しながら、年度を追って報告する。

4.1．平成 28 年度(2016)の研究成果

(1)教科書における言語文化関連語彙の調査

平成 20 年度の小学校学習指導要領改訂をはさんだ平成 18 年度版と 23 年度版の小学校国語教科書を対象にして、教科書内における語彙のコーパス研究が行われた。その際、平成 20 年度の学習指導要領では「伝統的な言語文化」における指導事項が示されており、これにかかる語彙の出現状況に焦点を当てて分析が行われた。その結果、「月」に関連する語彙が「伝統的な言語文化」という当該指導事項設置後に激増していることが示され、教科書における言語文化関連語彙の取り扱いにかかる小・中・高の系統と発展性とを視野に入れた実践開発への知見が示唆された（藤森,2016,国語教科書にのぼる月,読書科学 58(3), pp.133-146）。

(2)文部科学省指定研究開発校への取り組み

研究代表者である藤森と同分担者である田中（当該年度のみ）・徳井の所属する信州大学教育学部において、同附属松本幼稚園・小学校・中学校が幼・小・中一貫カリキュラムの開発にかかる研究開発校として文部科学省より指定され、平成 28 年度から４か年にわたる研究開発が開始された。この中で、藤森は幼児期から小学校低学年期をつなぐ「ことば」領域の開発リーダーとして、期間中、田中と附属学校園教員とを交えた月例研究会が開始された。その過程において幼・小・中一貫カリキュラムの概念図が創案され、幼児期から小学校低学年期への接続カリキュラムとして「ことば」領域を設定した。

(3)アクティブ・ラーニングと汎用的言語能力

教科横断型実践モデルのベースとなる汎用的言語能力について、この時期に教育界で話題となっていたアクティブ・ラーニングとの概念的関連性についての検討が行われた。この検討の中で、アクティブ・ラーニングの言い換えである「主体的・対話的で深い学び」が倉澤栄吉やカー

ル・ビューラーの実践理論と同じ視点に立っていることが指摘されるとともに、その基盤的国語学力として「ことばに向かう力」を措定し、語彙力に注目することの必要性が再認識された（藤森,2016,第四の要素としての語彙力,教育科学国語教育,804,pp.16-19）。

また、アクティブ・ラーニングを支える思考の要素として「広げる思考・深める思考・高める思考」の３要素が想定されることを実践理論として整理し、学会及び招待講演において発表した（藤森,2016,アクティブ・ラーニング視点の授業展開と評価をどう考えどう実践するか,ことばと学びを開く会,慶應義塾大学三田校舎,シンポジウム；藤森,2016,アクティブ・ラーニングを支える国語科の交流–広げる・深める・高める–,岡山県教育研究センター研修,招待講演;藤森,2016,アクティブ・ラーニングにおける学力と評価,富山県教育委員会教員研修,招待講演 など）。

(4)日本語教育における汎用的言語能力の検討

言語文化の観点に基づく汎用的言語能力概念について、国語科教育を超えた次元でこれを構築する方法的視座を得るために、日本語教育における複言語サポーター・外国人相談員のコンピテンシーについての調査研究が行われた。この調査研究は研究分担者の徳井を中心に進められ、外国人相談員に必要な資質能力についてのインタビューと分析とが行われた。その結果、以下の資質・能力を重要なものとして捉えているということが示唆された。

○個人レベル：粘り強さ、忍耐強さ、OJT としての学びの力、外国人当事者としての経験を活かす力等／対人レベル：聴く力、受容力、情報発信力、個の多様性への対応、スキーマ獲得の支援等／ネットワーキングレベル：相手と対等な関係を築く力、双方向のネットワーキング力、日本人コーワーカーとの協働／○社会レベル：社会の状況に対応する力

○状況や文脈に応じて自己の位置づけを変化させたり複数の言語の使用を変化させたりするコンピテンシー／異文化間の調整のコンピテンシー／ネットワーキングのコンピテンシー

これらの研究プロセスは国際学会等で発表され、より広い視野からの議論が交わされている（徳井,2016,ウェルフェアのためのコミュニケーション支援：外国人相談員の語りから.The 2016 Symposium on Japanese Language Education, イタリア: University of Ca' Foscari,口頭発表；徳井,2016,外国人自演のためのネットワーキング：複言語サポーターの語りから, Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference, カナダ: Crowne Plaza, Niagara Falls,口頭発表）。

(4)関係図書の出版

以下の著書が当該年度に出版された。

日本学校教育学会編・新井 外,2016,これからの学校教育を担う教師を目指す思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード,学事出版,205pp.共著

青国研編・藤森 外,2016,子供の側に立つ国語の授業,東洋館出版社,184pp.共著

大滝・高木・藤森 外,2016,変わる！高校国語の新しい理論と実践,大修館書店,22pp.共著

加賀美・徳井・松尾,2016,文化接触における場としてのダイナミズム,明石書店,183pp.共著

4.2. 平成 29 年度(2017)の研究成果

(1)「主体的・対話的で深い学び」の本質論的研究

前年度の研究で進められた汎用的言語能力とアクティブ・ラーニングとの概念的関連性の検討をさらに深め、「主体的・対話的で深い学び」の本質論が追究された。その中で、以下の点が示された（藤森,2018,なぜ「主体的・対話的で深い学び」が求められたのか：自己組織・相互作用・球的充実の視点から,日本語学 37(6),pp.2-13）。

○「主体的」とは社会的行為としての授業コミュニケーションが自己組織的であること。

○「対話的」とは自己ない対話をも含む相互作用であること。

○「深い学び」とは拡張・深化・昇華の学びが３次元的に展開する球的充実であること。

(2)「学びに向かう力・豊かな人間性」にかかる国外の実践理論

近年、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド等における学校現場で広く支持されている実践理論としてガイ・クラックストン(Guy Claxton)のラーニング・パワー・アプローチがあることを研究分担者の新井が見出し、当該年度にクラックストン氏へのインタビュー調査、同氏及び同氏を引用する著書・論文のレビュー、当該実践理論を採用する学校（イングランド）への訪問調査が実施された。その結果、クラックストン氏が提唱する４Rs 理論（Resilience, Resourcefulness, Reflectiveness, Reciprocity）が、汎用的言語能力の基盤的資質・能力「学びに向かう力・豊かな人間性」の構成概念として有用であることが示唆された（新井,2018,学びに向かう力の概念的検討–ガイ・クラックストンの４Ｒｓ理論を手がかりに–,城西大学教育課程センター紀要,2,pp.3-14）。

(3)国際学会におけるシンポジウムの開催

各国の言語文化の違いを越えて措定すべき国際標準としての汎用的言語能力を検討するため、2017 年７月にマドリードで開催された第 20 回欧州リテラシー学会で自主シンポジウムを開催した。テーマは「21 世紀におけるリテラシー教育の比較教育学的考察：日本・ヨーロッパ・アメリカ合衆国を対象として」である（藤森　外４名,2017,COMPARATIVE STUDIES OF LITERACY EDUCATION AMONG JAPAN, EUROPE, AND AMERICA IN THE 21st CENTURY,20th European Conference on Literacy, スペイン: マドリード大学,国際学会）。シンポジウムの中で、日本と欧米圏との読むことの学習指導における教育内容の差異と当該地域間の学校文化との関連性が議論された。

(4)日本語教育における汎用的言語能力の検討

2016 年度から引き続いて、研究分担者の徳井を中心とした日本語教育における汎用的言語能力の検討が行われた。当該年度ではこれまでのフィールドワークが論文化され、多文化クラスの評価分析、ウェルフェアのためのコミュニケーション支援、複言語サポーターのリテラシー等についての知見がまとめられた（徳井,2017,ウェルフェアのためのコミュニケーション支援―外国人相談員の語りから―,ヨーロッパ日本語教育,21,pp.331-336；徳井,2017,「多文化クラス」の評価分析再考―アクティブ・ラーニングの評価の課題―,異文化間教育,46,pp.79-92 他）。

4.3. 平成 30 年度(2018)の研究成果

(1)学校文化の比較教育学的考察と新教育課程における教育内容の検討

言語文化の基盤となる学校文化の特性に焦点を当て、「読むこと」を中心とした日本とイギリスの学校への参与観察研究を通して得られた知見が以下のようにまとめられた（藤森,2018,学校文化としての読むこと：初等学校の読みにおける日英比較,読書科学,60(3),pp.156-172）。

- ○民族・母語を同じくする国民が大多数を占める日本と、多民族・多言語国家の様相を呈するイギリスとの文化的背景の差異は、学校における「読むこと」の学習指導形態やカリキュラム構成に大きな違いを生んでいる。
- ○一方、tolerance（寛容性）と imagination（想像力）の育成という理念においては両国の学校文化の差異を越えて共通性が認められ、ここに「読むこと」における汎用的言語能力を措定する上での方向性が見出される。

また、小・中・高における新学習指導要領の告示にともない、全学校種で指導事項に設定されている「伝統的な言語文化」の教育内容について、「遊び」概念を軸とした一貫性のある教育内容が検討され、７種類の実践事例とともに論文発表された（藤森,2019,伝統的な言語文化と戯れる,月刊国語教育研究,561,pp.4-9）。さらに、平成 30 年告示の高等学校学習指導要領における教材の新たな取り扱いとして、文学的文章を素材にした「論理国語」の教材化研究方法論が発表され、資質・能力ベースの学力観に即した実践モデルの一例が示された（藤森,2019, 新学習指導要領と『山月記』,埼玉県高等学校国語教育研究会研修集録,pp.4-6）。

(2)国際学会における口頭発表と国内学会におけるシンポジウム

当該年度には、研究代表者の藤森と同分担者の徳井とが、それぞれ国際学会における口頭発表を行い、実践事例のケーススタディをもとに各国の研究者との議論が交わされた（藤森・吉永,2018, A smooth transition from ECE to elementary school education (ESE) focused on literacy education: Through a comparative case study between Japan and the UK,第 28 回ヨーロッパ幼児教育学会,ハンガリー: ブダペスト工科経済大学,口頭発表；徳井,2018,「日系人のハイブリッド性」をテーマにした授業実践,カナダ日本語教育振興会年次大会,カナダ:ヒューロン大学,口頭発表）。また、言語文化の観点における「言葉」概念の再検討をテーマにしたシンポジウムが開催され、ポップカルチャー、AI、マルチモーダルをキーワードに、現代社会に生きる若者たちを取り巻く「言葉」概念の再構築と教育内容の再検討が議論された（藤森　外４名,2018,国語科教育を問いなおす②（言葉ことば）, 第 135 回全国大学国語教育学会東京ウオーターフロント大会,武蔵野大学,シンポジウム）。

(3)日本語教育・市民性教育における汎用的言語能力

これまでの外国人相談員を中心としたコンピテンシー研究に加え、ハイブリッド性に着目した実践研究を重ねた成果が報告された（徳井,2018,日系人のハイブリッド性に着目した授業実践―視覚的な手法を用いて,信州大学教育実践研究,pp.71-78 他）。研究では、イメージと写真という視覚的な素材を組み合わせた日本語教育実践が行われ、それによって学習者に自らのステレオタイプに気づかせるとともに、「日系人」のハイブリッド性への気づきを促すことが示唆されている。一方、研究分担者の新井は、専門領域とする市民性教育（Citizenship Education）の比較教育学的考察という観点から汎用的言語能力について検討し、その成果が（公社）経済同友会政治改革委員会の招待講演において「英国におけるシティズンシップ教育の推進と成果」と題して発表された。

(4)関係図書の出版

３か年の研究成果として、小・中・高の教育関係者に向けた以下の著書が刊行された

藤森,2018,学力観を問い直す：国語科の資質・能力と見方・考え方,明治図書出版,201pp.単著

また、平成 30 年３月の高等学校学習指導要領の告示に伴い、以下の著書が刊行された。

大滝,高木,藤森　外(2019),高等学校学習指導要領解説国語編,東洋館出版社,368pp.共著

大滝,高木,藤森　外(2019),高等学校学習指導要領をふまえた授業づくり実践編：資質・能力を育成する 14 事例,238pp.共著

4.4. 令和元年度(2019)の研究成果

(1)幼小接続への視点

言語文化の観点による汎用的言語能力の検討を重ねてきた結果、当初の計画にはなかった教育実践場面として、幼児教育への視座が必要であるという認識が得られた。特に、新しい学習指導要領における資質・能力概念は、幼稚園教育要領にある「言葉」領域、及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい力」と深く関連しており、この点についての検討と追究がさらに必要であることが認識された。その中で、幼稚園における絵本読み聞かせ場面がもたらす社会性育成の原理

を談話分析によって解明した研究については一定の成果がまとまり、論文として発表された（藤森・吉永,2019,社会的行為としての絵本読み聞かせ,読書科学,61(2),pp.64-76）。

また、本研究と併行して進められてきた信州大学教育学部附属松本学校園における文部科学省指定研究開発の取り組みが成果発表の年度を迎え、公開研究会において４年間の研究成果が発表された（藤森,2019,幼小中一貫カリキュラムを目指す言葉の教育,信州大学教育学部附属松本学校園公開研究会,招待講演）。

(2)国際学会における発表とシンポジウム

幼小接続と汎用的言語能力の育成をテーマとした比較教育学的考察及び実践理論研究について、その研究成果の一部がヨーロッパで開催された２つの学会で発表された（吉永・藤森,2019, A Smooth Transition from Early Childhood Education(ECE) to Primary School Education (PSE) Focused on Literacy Education :Through a Comparative Case Study of Japan and the UK Through A Comparative Case Study of Japan and the UK, 第 21 回ヨーロッパリテラシー学会,コペンハーゲン: Efterslægten HF-Centret,口頭発表；藤森,2019, Why use Circle Activities in ECE and CSE? Through the Theory of Cultural Study, 第 29 回ヨーロッパ幼児教育学会,ギリシャ：テッサロニキ・アリストテレス大学,シンポジウム）。

これらの学会発表は、いずれも日本と欧州との幼稚園・小学校等を比較教育学的に検討したものであり、論点はその差異性よりも共通性の指摘に置かれている。藤森は各国の幼児教育・学校教育における物理的環境に注目し、施設の配置や学習形態が原理的にアフォードする学びの質的問題について、日本・イギリス・ハンガリーの３者比較によって検討している。

(3) 日本語教育における汎用的言語能力

日本語教育における汎用的言語能力の育成を目指した実践モデルの構築に向けて、研究分担者の徳井を中心に実践研究が拡張された。その研究成果として以下の知見が示された（徳井,2019, ライフヒストリーを読み解く多文化教育の実践, 信州大学教育学部次世代型学び研究開発センター紀要,18,pp.159-168 など）。

○ライフヒストリーを読み解く実践

日系アメリカ人のライフヒストリーを読み、当事者の立場に立ちアイデンティティという観点から考察する実践が行われた。授業の振り返りシートの分析の結果、認知的なレベルだけではなく感情的なレベルでの学びが可能になることが示唆された。

○アクティブ・ラーニングにおける評価の実践

アクティブ・ラーニングを能動的な行動そのものだけでは捉えるのではなく、学びが学習者にどのように変化をもたらしたかという「認知プロセスの外化」を含めた意味でアクティブ・ラーニングを捉えることの重要性が明らかになった。また、大学で行った多文化クラスのふりかえりシートを分析し、ふりかえりシートの記述そのものが学習者にとって「認知プロセスの外化」を促すものになったことが示された。

(4)『読書教育の未来』の刊行

本研究の進行に合わせ、研究代表者の藤森は、乳幼児期から成人、学校から家庭・地域社会に及ぶ広範な視野で汎用的言語能力の育成と教科横断型実践モデルを探究する専門書の編集作業を進めてきた。その成果物が最終年度に刊行されている（藤森,秋田,福田,上谷,甲斐　外 30 名, 2019,読書教育の未来,ひつじ書房,384pp.編著）。本書は、教育心理学・図書館学・情報科学・国語科教育等における第一線の研究者が分担執筆をし、読書と発達・読書と心理・読書と学校教育・読書と社会活動の４部門からなる専門研究書として構成されている。

4.5. 社会貢献

期間中における研究代表者及び研究分担者の主な社会貢献活動のうち、本研究と関連性を有する主なものは以下の通りである。

藤森(2016-2017)中央教育審議会教育課程部会国語ワーキング,委員
藤森(2016-2018)高等学校学習指導要領の改訂にかかる編集協力者
藤森(2017-2019)高等学校学習指導要領解説国語編,執筆者
徳井(2017-2019)文化審議会（国語分科会）,臨時委員
徳井(2019-2020)長野県多文化共生推進指針改定検討会,委員

4.6. 今後への課題

幼児教育との連携・接続が極めて重要な研究課題であることが認識された。これについては既に本研究の中でもいくつかの成果が示されているが、今後は乳幼児の成長と発達とを学校教育にどう関わらせるかという点についてのより精緻な臨床的研究が望まれる。

また、徳井が中心となって進めてきた日本語教育における汎用的言語能力の育成についても、研究対象の拡張が望まれる。すなわち、これまで主として 10 代以上の生徒・学生等を中心として重ねてきた研究対象を、幼児期に拡張するという課題である。

一方、高等教育すなわち大学における実践研究という視座も必要と考えられる。これをも含めるならば、およそ 20 年間に及ぶ言語能力の発達と成長を検討するという大事業になるわけであるが、「言語文化」というキーワードをもってこれを焦点化することにより、巨視的かつ微視的な研究を推進する切り口が見出されると確信している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 藤森裕治	４．巻 59
２．論文標題 新学習指導要領と『山月記』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 埼玉県高等学校国語教育研究会研究集録	６．最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治	４．巻 179
２．論文標題 英国の初等学校における物語の読みの教育	５．発行年 2019年
３．雑誌名 LISN	６．最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治・吉永安里	４．巻 61(2)
２．論文標題 社会的行為としての絵本読み聞かせ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 読書科学	６．最初と最後の頁 64-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.61.2_64	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治・村松浩幸・東原義訓　他	４．巻 18
２．論文標題 教員養成におけるプログラミング教育の指導力育成の実践	５．発行年 2019年
３．雑誌名 信州大学教育学部次世代型学び研究開発センター紀要	６．最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00021841	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 18
2．論文標題 ライフヒストリーを読み解く多文化教育の実践	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信州大学教育学部次世代型学び研究開発センター紀要	6．最初と最後の頁 159-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00021850	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 14
2．論文標題 外国人相談員・日本人コーワーカーの語りにみる「能力」・「協働」の比較	5．発行年 2020年
3．雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6．最初と最後の頁 168-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00022058	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 37(6)
2．論文標題 なぜ「主体的・対話的で深い学び」が求められたのか：自己組織・相互作用・球的充実の視点から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 60(3)
2．論文標題 学校文化としての読むこと：初等学校の物語の読みにおける日英比較	5．発行年 2018年
3．雑誌名 読書科学	6．最初と最後の頁 156-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.19011/sor.60.3_156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 561
2．論文標題 伝統的な言語文化と戯れる	5．発行年 2019年
3．雑誌名 月刊国語教育研究	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 179
2．論文標題 英国の初等学校における物語の読みの教育	5．発行年 2019年
3．雑誌名 LISN	6．最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 59
2．論文標題 新学習指導要領と『山月記』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 埼玉県高等学校国語教育研究会研修集録	6．最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 13
2．論文標題 外国人相談員に必要な資質・能力ー外国人相談員の語りからみえてくるもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6．最初と最後の頁 136-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00021361	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 17
2．論文標題 日系人のハイブリッド性に着目した授業実践―視覚的な手法を用いて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 信州大学教育実践研究	6．最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00021254	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 49
2．論文標題 外国籍児童就学支援事業の構築・再構築過程	5．発行年 2019年
3．雑誌名 異文化間教育	6．最初と最後の頁 27-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 751
2．論文標題 新学習指導要領における指導と評価(1)小学校	5．発行年 2017年
3．雑誌名 指導と評価	6．最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 16
2．論文標題 教員養成学部におけるICT模擬授業の取り組み：コンピュータ利用教育を通して	5．発行年 2017年
3．雑誌名 教育実践研究	6．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_i	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治	４．巻 58
２．論文標題 これからの国語教育：汎用型言語能力を目指して	５．発行年 2018年
３．雑誌名 埼玉県高等学校国語教育研究会研究集録	６．最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤森裕治	４．巻 810
２．論文標題 国語科における見方・考え方	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育科学国語教育	６．最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新井浅浩	４．巻 2
２．論文標題 学びに向かう力の概念的検討―ガイ・クラックストンの４Ｒｓ理論を手がかりに―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 城西大学教育課程センター紀要	６．最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.20566/2433541X_2_3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 徳井厚子	４．巻 46
２．論文標題 「多文化クラス」の評価分析再考ーアクティブラーニングの評価の課題	５．発行年 2017年
３．雑誌名 異文化間教育	６．最初と最後の頁 79-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 21
2．論文標題 ウェルフェアのためのコミュニケーション支援ー外国人相談員の語りから―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6．最初と最後の頁 331-336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 徳井厚子	4．巻 10
2．論文標題 複言語サポーターにとってのコンピテンシー：複言語・複文化主義との関わりを中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10091/00019519	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 804
2．論文標題 第四の要素としての語彙力	5．発行年 2016年
3．雑誌名 教育科学国語教育	6．最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 58(3)
2．論文標題 国語教科書にのぼる月：文化リテラシーとしての「伝統的な言語文化」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 読書科学	6．最初と最後の頁 133-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤森裕治	4．巻 1376
2．論文標題 伝統芸能の国語教育的価値	5．発行年 2016年
3．雑誌名 教育研究	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新井浅浩	4．巻 20
2．論文標題 【自著を語る】マンディ・スワン ＋アリソン・ピーコック＋ スーザン・ ハート ＋メリー・ジェーン・ドラモンド= 著　新井浅浩 ＋ 藤森裕治 ＋ 藤森千尋 = 訳『イギリス教育の未来を拓く小学校―「限界なき学びの創造」プロジェクト』 （大修館書店、2015 年）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日英教育研究フォーラム	6．最初と最後の頁 185-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中真由美・中村伸哉	4．巻 46
2．論文標題 小学校外国語活動におけるCAN-DOリストに基づく単元と評価	5．発行年 2017年
3．雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 201-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計50件（うち招待講演　30件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 藤森裕治
2．発表標題 幼小中一貫カリキュラムを目指す言葉の教育
3．学会等名 信州大学附属松本学校園公開研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を問い直す
３．学会等名 日本国語教育学会長野地区集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 A Smooth Transition from Early Childhood Education(ECE) to Primary School Education (PSE) Focused on Literacy Education : Through a Comparative Case Study of Japan and the UK Through A Comparative Case Study of Japan and the UK
３．学会等名 第21回ヨーロッパリテラシー学会（コペンハーゲン）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 Why use Circle Activities in ECE and CSE? Through the Theory of Cultural Study
３．学会等名 第29回ヨーロッパ幼児教育学会（テッサロニキ）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を問い直す
３．学会等名 日本国語教育学会岩手支部研究集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 汎用的言語能力について
３．学会等名 諏訪国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を問い直す
３．学会等名 東三河高等学校国語教育研究大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を問い直す：幼児教育から初等中等教育を貫く資質・能力とは何か
３．学会等名 岡山県小学校国語教育研究集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 『対話的』に深まる学びとは―具体的事例から考える
３．学会等名 ことばと学びを開く会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 予測不可能事象
３．学会等名 第29回信州大学国語教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 文学教育の本質
３．学会等名 佐久国語文学同好会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 授業は予測不可能
３．学会等名 松本塩尻地区国語教育同好会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 外国人相談員・日本人コーワーカーの語りにみる「能力」・「協働」の比較
３．学会等名 異文化間教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を見直す：国語科の資質・能力、見方・考え方とは何か
３．学会等名 明石市小学校国語教育研究会夏季大会（明石市立花園小学校）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治・吉永安里
２．発表標題 A smooth transition from ECE to elementary school education (ESE) focused on literacy education: Through a comparative case study between Japan and the UK
３．学会等名 第28回ヨーロッパ幼児教育学会（ブダペスト工科経済大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 子どもと読書：日英の読書教育
３．学会等名 福井県こども読書指導者研修会（鯖江市教育センター）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 千田洋幸・奥泉香・藤田彬・石田喜美・藤森裕治
２．発表標題 国語科教育を問いなおす②（言葉ことば）
３．学会等名 第135回全国大学国語教育学会東京ウオーターフロント大会(武蔵野大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治・甲斐利恵子・鹿毛雅治・黒田英津子
２．発表標題 ことばの学びのさまざまな価値――「広い学び」「高い学び」「深い学び」
３．学会等名 第12回ことばと学びをひらく会（慶應義塾大学三田校舎）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 学力観を問い直す
３．学会等名 浜松市教育研究会国語研究部（浜松市教育会館）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 文学教育の本質について考える：日本と英国の学校文化比較を通して
３．学会等名 東京学芸大学国語教育学会公開研究大会（東京学芸大学附属世田谷小学校）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 「日系人のハイブリッド性」をテーマにした授業実践
３．学会等名 カナダ日本語教育振興会 2018年度年次大会（ヒューロン大学）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 外国籍就学支援事業の構築・再構築過程
３．学会等名 異文化間教育学会第39回大会(新潟大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 新井浅浩
２．発表標題 英国におけるシティズンシップ教育の推進と成果
３．学会等名 （公社）経済同友会　政治改革委員会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治・吉永安里
２．発表標題 幼小接続におけることばの教育：日・英の事例研究を通して
３．学会等名 第134回全国大学国語教育学会大阪大会(大阪教育大学)
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治　他４名
２．発表標題 COMPARATIVE STUDIES OF LITERACY EDUCATION AMONG JAPAN, EUROPE, AND AMERICA IN THE 21st CENTURY
３．学会等名 20 th European Conference on Literacy（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治・吉永安里
２．発表標題 社会的行為としての絵本読み聞かせ
３．学会等名 第61回日本読書学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 明日につながる単元のまとめ方：よりよい評価の在り方
３．学会等名 石川県教育センター研修（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 国語科における「見方・考え方」―概念化・線条性・文脈化・関係性―
３．学会等名 日本国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 国語科における見方・考え方
３．学会等名 上小国語研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 汎用型言語能力について
３．学会等名 諏訪国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 次期学習指導要領がめざす汎用型学力観
３．学会等名 岩手県盛岡市立城南小学校公開研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 対話こそが未来を拓く
３．学会等名 町田市立第五小学校公開研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の授業
３．学会等名 鳥取県教育研究センター研修（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 アクティブ・ラーニング視点の授業展開と評価をどう考えどう実践するか
３．学会等名 ことばと学びをひらく会
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 言語文化の視点から子供の学びをとらえる：汎用型言語能力の探求
３．学会等名 日本国語教育学会長野研究集会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 大学入試改革に向けた国語学力の育成
３．学会等名 第79回日本国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 対話的思考の型：言語文化の視点から汎用型言語能力を創造する
３．学会等名 香川県教育研究会国語部会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 未来に生きることばの力
３．学会等名 名古屋市小学校国語教育研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 アクティブラーニングを支える国語科の交流―広げる・深める・高める―
３．学会等名 岡山県教育研究センター（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 高校国語の行方とアクティブ・ラーニング
３．学会等名 岡山県高等学校教育研究会国語部会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 国語科における課題探究型授業のあり方
３．学会等名 酒田市教育研究所（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 表現活動を重視した国語教育
３．学会等名 安曇野市・北安曇教育課程研究協議会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 アクティブ・ラーニングにおける学力と評価
３．学会等名 富山県教育委員会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 藤森裕治
２．発表標題 新しい学習指導要領とアクティブ・ラーニングの行方
３．学会等名 佐久国語文学同好会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 田中真由美・中村伸哉
２．発表標題 小学校外国語活動におけるCAN-DOリストに基づく単元と評価
３．学会等名 第46回中部地区英語教育学会三重大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中真由美
２．発表標題 教科横断型リテラシー教育モデル開発に向けての一考察：英語教育におけるクリティカル・リーディングの枠組み構築から見えてくるもの
３．学会等名 第60回日本読書学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中真由美
２．発表標題 アクション・リサーチによるクリティカル・リーディングのための枠組み構築
３．学会等名 全国英語教育学会第42回埼玉研究大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 ウェルフェアのためのコミュニケーション支援：外国人相談員の語りから
３．学会等名 The 2016 Symposium on Japanese Language Education
４．発表年 2016年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 複言語サポーターにとってのコンピテンシー：語りから示唆されるもの
３．学会等名 第37回異文化間教育学会大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 徳井厚子
２．発表標題 外国人支援のためのネットワーキング：複言語サポーターの語りから
３．学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference
４．発表年 2016年

〔図書〕　計10件

１．著者名 大滝一登，高木展郎，藤森裕治，島田康行，幸田国広，山下直，山元隆春他	４．発行年 2019年
２．出版社 明治書院	５．総ページ数 238
３．書名 高等学校新学習指導要領をふまえた授業づくり実践編：資質能力を育成する14事例	

１．著者名 藤森裕治，秋田喜代美，甲斐雄一郎，上谷順三郎，福田由紀 他	４．発行年 2019年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 384
３．書名 読書教育の未来	

１．著者名 藤森裕治	４．発行年 2018年
２．出版社 明治図書出版	５．総ページ数 201
３．書名 学力観を問い直す：国語科の資質・能力と見方・考え方	

1．著者名 田近洵一，中村和弘，塚田泰彦，藤森裕治　他	4．発行年 2018年
2．出版社 教育出版	5．総ページ数 230
3．書名 小学校国語科授業研究　第五版	

1．著者名 大滝一登，高木展郎，山下直，藤森裕治　他	4．発行年 2019年
2．出版社 東洋館出版社	5．総ページ数 368
3．書名 高等学校学習指導要領解説国語編	

1．著者名 大滝一登，高木展郎，山下直，藤森裕治　他	4．発行年 2019年
2．出版社 明治書院	5．総ページ数 238
3．書名 高等学校新学習指導要領をふまえた授業づくり実践編：資質能力を育成する14事例	

1．著者名 新井浅浩	4．発行年 2016年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 205
3．書名 これからの学校教育を担う教師を目指す 思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード	

１．著者名 藤森裕治	４．発行年 2016年
２．出版社 東洋館出版社	５．総ページ数 184
３．書名 子供の側に立つ国語の授業	

１．著者名 藤森裕治	４．発行年 2016年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 222
３．書名 変わる！高校国語の新しい理論と実践	

１．著者名 徳井厚子	４．発行年 2016年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 183
３．書名 文化接触における場としてのダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者総覧
http://www.shinshu-u.ac.jp/soar/
信州大学研究者総覧SOAR
http://www.shinshu-u.ac.jp/soar/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	徳井　厚子 (Tokui Atsuko) (40225751)	信州大学・学術研究院教育学系・教授 (13601)	
研究分担者	新井　浅浩 (Arai Asahiro) (80269357)	城西大学・経営学部・教授 (32403)	
研究分担者	田中　真由美 (Tanaka Mayumi) (50469582)	信州大学・学術研究院教育学系・助教 (13601)	平成28年度のみ参加